

第6章 子育て支援に取り組む地域活動推進シンポジウム in 郡山

1. シンポジウムの概要

テーマ：地域ぐるみの子育て支援にどう取り組むか

日時：平成19年1月20日(土) 10時20分～15時30分

場所：郡山市総合福祉センター

参加人数：80名

開催目的：安心して子どもを産み育てられる地域にするためには、地域の人たちによる子育て支援活動が重要となる。そこで、こうした子育て支援活動を広め、活動を活発にするために、子育て支援活動に取り組む運動関係者に一般住民の参加も得て、地域における子育て支援活動について、「私たちはどういった『子育て支援』ができるか」をテーマにワークショップを行う。そして、ワークショップで出た意見を素材に、実践活動者、学識経験者、保育・保健関係者を交えて、地域の特性に応じた地域ぐるみの子育て支援活動のあり方や進め方を話し合う。

タイムスケジュール：

10：00～10：20 受付

10：20～10：30 開会行事

10：30～12：00 グループ討論

- ・地域における子育て支援活動としてどういった取り組みができるか
- ・取り組むにはどういった問題があるか
- ・取り組んでいてどういった問題があるか

12：00～13：00 休憩・昼食

13：00～13：30 グループ発表

13：30～15：30 全体協議

テーマ「地域ぐるみの子育て支援をどう進めるか」

事例発表

横浜市神奈川区「すくすくかめっ子」

報告者：塚原 泉（「すくすくかめっ子・親がめ会議」メンバー）

質疑・応答

塚原 泉（「すくすくかめっ子・親がめ会議」メンバー）

遠藤 重子（郡山市生活学校連絡協議会会長・小金林保育園園長）

渡部 哲男（福島大学大学院名誉教授）

コーディネーター

角替 弘規（桐蔭横浜大学助教授）

峯 佳孝（(財)あしたの日本を創る協会）

2. グループ発表の主な内容

本シンポジウムでは、参加者が5つのグループに分かれ、「地域における子育て支援活動とし

てどういった取り組みができるか」、「取り組むにはどのような問題があるか」、「取り組んでいてどのような問題があるか」の3点について、ワークショップ形式のグループ討議を行った。午後からの全体協議に先立って、各グループから午前中のグループ討議の内容が報告された。

第1グループからは、現在取り組んでいることとして、小学生の登下校時の「見守り隊」及び「パトロール隊」の事例が報告され、子どもへの声掛け時の難しさが報告された。また、個人で子どもの一時預かりをしている事例も報告され、病気や怪我の時の体制作りが必要であるとされた。

第2グループからは声掛けをすること、挨拶をすることの重要性が指摘された。また、現代の子どもたちの食生活や遊び場の環境を懸念して、食生活をきちんとしてあげたい、伝承遊びを通して世代間の交流を図りたいという意見も示された。さらに、子どもたちや若い母親・父親との交流の機会の減少が問題点として指摘された。同世代で固まるのではなく、互いに交流することで価値観の違いを乗り越え互いに歩み寄ることが大事であろうということであった。

第3グループは、子どもたちをどう守ればいいのかという観点から議論を進めた。そして家族が一番大事であるという見方が示された。少子化の結果、地域に子どもがおらずどうすればいいかわからないという声もあった。さらに、親教育も重要であるとの見方が示された。

第4グループからは、防犯協会の方からの事例が発表された。一日3回の巡回に加え、小学校の校長先生からの要請を受けて重点的な地域巡回を行ったところ、挨拶が増え問題事案が減少したとの実績が報告された。今は母親だけでなく父親の愛情も希薄になっていると感じられる。親が若くなっている分、子育てについても未熟だと感じられるとのことであった。学校の教師や親がもっと子育てについて認識してほしいとの意見も示された。

第5グループから親教育の必要性に加え、子育て支援への参加者の少なさが問題点として指摘された。また親子をめぐる事件や、若い人の晩婚化・非婚化、そしてそれらへの支援のあり方についても今後検討する必要があるとされた。そして様々な背景を持った人たちが一堂に集まり交流する機会があればよいのではないかという意見が示された。

どのグループにおいても活発に意見が出され、有意義な討議が行われた。共通して見られたのは、子どもへの声掛けの重要性、家族の重要性、親教育の必要性であった。こうした認識の上に、世代を超えた人々の交流の場を設けることが求められた。これらの問題意識に基づいた子育て支援が今後どのように郡山地域に展開されるのか、期待される場所である。

3. 全体協議の主な内容

(1) 事例発表

地域ぐるみの子育て支援について、横浜市神奈川区の「すくすくかめっ子事業」について、「すくすくかめっ子・親がめ会議」のメンバーである塚原泉さんから事例発表があった（当日配布資料参照）。

「すくすくかめっ子事業」とは、乳幼児期から青少年期までを見通した、子育て・子育てを育む風土作りを目指し、神奈川区を子育てが楽しいまちにするために区と住民の信頼関係の下





に展開される子育て事業で、空き店舗や自治会館等の地域の様々な資源を活用し、ボランティアで支えあい、親子のたまり場を作っている事業である。

事業は全てボランティアで支えられ、延べ人数にして 3000 人が参加している。年齢的には 60～70 歳代が最も多く、次に 40～50 歳代、その次に 20～30 歳代という構成になっているが、全ての年齢層、そして性別に関係なく、誰もが支え手になってくれている。

親がめ会議はこうした支え手のやる気を維持するため、学習会やシンポジウム、たまり場同士の交流会を年に複数回実施している。ボランティアの参加意欲も高く、毎回の学習会は出席者で常に満杯という。区との共同事業としたことで、広報や情報の共有がとても容易になり、子育て支援を行う場合には行政との連携をいかに図っていくかということがとても重要とのことである。特に情熱のある行政職員との協力を図ることが大きいという。

「すくすくかめっ子」の活動の特徴は「なにもしないこと」である。「なにもしない」ということは特別な活動プログラムを用意したりせず、ただ場所を提供するだけ、という意味である。プログラムがないことによって、参加者同士で会話が生まれ、人と人とのつながりができた。プログラムのない自由な空間が、今の子育て世代にとって、とても大切であるとのことであった。同時に、何も準備をしないことが、この活動を支える支え手にとっても重要とのことである。ボランティア活動である以上、支え手に過剰な責任や負担が生じることは、長く活動を継続していく上で大きな支障となる。その意味でも特別なプログラムを必要としないことは、できる人ができる時に無理なく楽しく活動を続けていく上での重要な鍵となる。

怪我等への対応について、「すくすくかめっ子」では「怪我と弁当は自分もち」という原則で貫いている。これについての共通理解がきちりできていないと何もできないとのことである。しかしながら、過去 5 年間に於いて、怪我や苦情については一件も報告されていない。食育についても同様で、過去に食中毒等の問題は一切起こっていないという。食べ物は人と人をつなぐものであるため、食を通じてのコミュニケーションを図ることは地域の力を向上させる上でとても大きな要素になるということであった。

塚原さんは活動を通して、町を支えているという実感を得ることがとても楽しいという。支え手同士が支えあい、子どもたちや若い世代からエネルギーをもらい、年配の世代からコミュニケーションスキルを学び、互いに学びあい支えあう関係がとても楽しいという。そして、地域における子育て支援活動を行う時に、異なる世代がコミュニケーションを深め、互いに支えあう中で、次の世代に濃密な人間関係そのものを伝えていってもらいたいと願っている。

どのような活動をすればいいのか色々迷うことがあると思うが、まずは活動を始めることが大事であると、塚原さんは強調する。とりあえずやってみて、失敗した時には後から修正すればよい。まずは行動であるということをお訴えられた。

(2) 質疑応答と全体討議

「すくすくかめっ子事業」の事例発表に引き続いて質疑応答が行われた。

フロアからは、様々な地域活動を行う中で、周囲から批判や非難が出ることについて、どのように対処していけばよいかという質問があった。塚原さんは、批判や非難は何度も出てくると答え、大事なはその批判や非難を一人だけで受けないこと、必ず信頼できる仲間を作り、

仲間で受け止めるという姿勢が大事だとした。そのことでマイナスがプラスに転じることもあるということであった。また、若い父親をどのように活動に誘えばよいかという質問には、より具体的な活動を、母親を通じて依頼するのが良いのではないかというアドバイスがあった。

郡山市生活学校連絡協議会会長で、保育園の園長でもある遠藤重子先生からは、近年の親が子どもとうまくコミュニケーションが取れておらず、感謝の観念が不足しているようにも思えると、今後の子育てのあり方への強い懸念が示された。子どもや親に接する時は押し付けてはいけない、少しずつヒントを出すようにして接することが大事であるという指摘があった。

グループ討議において親教育の必要性が強く指摘されていたことについて、塚原さんから、共感を基本とした親への接し方が提案された。現代の子育ては歴史的にも稀に見るほど孤独な子育てになっている。この時代の子育てがいかに大変で寂しいのか、それを聞いて受け止めて信頼関係を築いた上で活動に誘い込んでいくことがとても大切であるということであった。

遠藤先生によれば郡山地域には子育て支援をしたい人はたくさんいる一方で、地域によってはまったく子どもがいない等、首都圏とは異なる事情を抱えているという。子どもが少ないだけでなく、仕事等に忙しい若い親たちといかにコミュニケーションをとっていくかということも課題として考えられるということであった。

全体討議の結果、最も重要なこととしてまとめられるのは次の点であろう。

ひとつは「行動すること」である。心配や戸惑いが数多くあるとしても、まずは行動を起こさなければ始まらない。行動を起こすことを通じて、支援する側、支援を受ける側に様々な変化や問題が生じると思われるが、その場その場で仲間と協力しつつ対処することが重要である。

2つ目には「場を作る」ことである。それは支援する側も支援を受ける側も心地よい場所であることが大切である。互いに負担にならないように、そして互いに支えあえるように、居心地のよい子育ての場、親子の居場所が求められている。

3つ目には地域の状況に適した支援のあり方の模索である。子どもの数が極端に少なく、親とのコミュニケーションも少ない状況において、それらに適した支援のあり方とはなにかということを、世代と立場を超えた議論の中で考えていくことが重要である。

4. シンポジウムの感想

シンポジウムの終了後、参加者に感想を伺うと、「どのグループも同じ内容のお話がでていて、みなさん考えていることが一緒なのだということが分かった。みんなが同じ考えというところに糸口があると思った」、「陽だまりの縁側のように温かく接することで、構えることなく、仲間になっていくことが良いことと思った。」等の感想が見られた。このシンポジウムがボランティア活動そのものに対する捉え方を見直す機会として役立ててもらえたようである。

また、「若い方々の参加を多くしたいと思いましたので是非また希望します。仲間を誘って参加したいと思いました。子育てに関することならどんなことでも良いと思います。」等、より広い年齢層の参加を得て、より具体的な内容について突っ込んだ議論をしていきたいという積極的な意見も寄せられた。

郡山における子育て支援への取り組みはまだ端緒についたばかりである。まずは行動を起こし、様々な試行錯誤を繰り返すことによって、充実した子育て支援活動が行われることを願うばかりである。

最後に、シンポジウムの開催に当たってご協力戴いた関係者の方々に御礼申し上げます。